

『日本の気候変動 2025 —大気と陸・海洋に関する観測・予測評価報告書—』（詳細編）正誤表（2025年6月17日）

対象	正	誤
第 9.2.1 項 第二段落 (p. 205)	このような条件に合う地点として、...4 海域を平均した値を日本沿岸の長期的な海面水位の評価に用いた（ <u>1991～2020</u> 年平均値からの差を表す）。	このような条件に合う地点として、...4 海域を平均した値を日本沿岸の長期的な海面水位の評価に用いた（ <u>1981～2010</u> 年平均値からの差を表す）。
第 9.2.1 項 図 9.2.2 キャプション (p. 207)	○（青実線）は…（縦軸の目盛は図の右側）。いずれも、 <u>1991～2020</u> 年の平均値との差（ <u>1991～2020</u> 年平均値からの差を表す）。	○（青実線）は…（縦軸の目盛は図の右側）。いずれも、 <u>1981～2010</u> 年の平均値との差（ <u>1981～2010</u> 年平均値からの差を表す）。
第 9.2.2 項 第一段落 三文目 (p. 208)	4°C上昇シナリオ（RCP8.5）の 21 世紀末には、日本 <u>南方</u> の太平洋では上昇量が 0.8 m 以上であるのに対し、	4°C上昇シナリオ（RCP8.5）の 21 世紀末には、日本 <u>南部</u> の太平洋では上昇量が 0.8 m 以上であるのに対し、
第 9.2.2 項 第四段落 二文目 (p. 209)	ただし、上下動はシナリオに依らず <u>予測</u> 期間で一定とみなされており、…。日本沿岸は、そのような <u>不確実性</u> が大きな場所であるために、上の見積もりでは地殻の上下動の影響は考慮されていない。	ただし、上下動はシナリオに依らず <u>予報</u> 期間で一定とみなされており、…。日本沿岸は、そのような <u>不確実性</u> が大きな場所であるために、上の見積もりでは地殻の上下動の影響は考慮されていない。
第 9.3 節 図 9.3.1 キャプション (p. 212)	右側の縦棒は <u>不確実性</u> が低い現象を含まない場合の 2100 年における 17～83%のパーセンタイル。	右側の縦棒は <u>不確実性</u> が低い現象を含まない場合の 2100 年における 17～83%のパーセンタイル。

対象	正	誤
第 11.2.1 項 第三段落 (p. 224)	<p>図 11.2.1 は、…毎正時に 1 m 以上の潮位偏差（高潮）を観測した回数を、年ごとに示したものである <u>（痕跡に基づく推定値も含む）</u>。この図によると、潮位偏差の最大値が 2.5 m を超えたのは、① 伊勢湾台風（1959 年）時の名古屋（3.5 m）、② 台風第 21 号（2018 年）時の大阪（2.8 m）、③ <u>第二室戸台風（1961 年）時の大阪（2.6 m、痕跡による）</u>、④ 台風第 23 号（2004 年）時の室戸岬（2.5 m）の <u>4</u> つのみであり、国内における大半の潮位偏差は 1 m から 2 m である。…また、偏差が 1 m 以上の観測回数の平均をとるとここ 20 年で大きくなるが、これは、2004 年の大きな観測回数（18 <u>回</u>）の寄与が大きい。</p>	<p>図 11.2.1 は、…毎正時に 1 m 以上の潮位偏差（高潮）を観測した回数を、年ごとに示したものである。この図によると、潮位偏差の最大値が 2.5 m を超えたのは、① 伊勢湾台風（1959 年）時の名古屋（3.5 m）、② 台風第 21 号（2018 年）時の大阪（2.8 m）、③ 台風第 23 号（2004 年）時の室戸岬（2.5 m）の <u>3</u> つのみであり、国内における大半の潮位偏差は 1 m から 2 m である。…また、偏差が 1 m 以上の観測回数の平均をとるとここ 20 年で大きくなるが、これは、2004 年の大きな観測回数（18 <u>個</u>）の寄与が大きい。</p>
第 11.2.1 項 図 11.2.1 (a) キャプション (p. 224)	<p>(a) 気象庁の検潮所 50 地点で観測された潮位偏差（高潮）の最大値 <u>（痕跡に基づく推定値も含む）</u>、(b) 毎時潮位偏差（高潮）1 m 以上を観測した回数。</p>	<p>(a) 気象庁の検潮所 50 地点で観測された潮位偏差（高潮）の最大値、(b) 毎時潮位偏差（高潮）1 m 以上を観測した回数。</p>
第 11.2.2 項 第五段落 三文目 (p. 226)	<p>再現期間が数年程度の高頻度の高潮の潮位偏差は、現在気候に比べて将来気候の方が <u>小さい</u> が、再現期間が長期になると将来気候の方が <u>大きく</u> なる傾向が見られる。</p>	<p>再現期間が数年程度の高頻度の高潮の潮位偏差は、現在気候に比べて将来気候の方が <u>低い</u> が、再現期間が長期になると将来気候の方が <u>高く</u> なる傾向が見られる。</p>

対象	正	誤
第 11.3.2 項 第二段落 五文目 (p. 230)	一方で、年平均発生確率 1/10 <u>以下</u> の低頻度の極端波高は増加する予測も報告されており、	一方で、年平均発生確率 1/10 <u>以上</u> の低頻度の極端波高は増加する予測も報告されており、
第 11.3.2 項 図 11.3.2 タイトル (p. 230)	台風による極端な波高（10 年確率値）の将来変化 <del>（％）</del>	台風による極端な波高（10 年確率値）の将来変化 <u>（％）</u>
第 11.6 節 第一段落 七、八文目 (p. 233)	吹き寄せに及ぼす地形の影響は、湾奥における水塊の収れんが <u>潮位</u> 偏差に最も大きな影響を与える。以上の関係により、本章で紹介したような <u>潮位</u> 偏差が数 m に及ぶ大規模な高潮災害においては、吹き寄せ効果の寄与が重要な役割を果たすことが分かる。	吹き寄せに及ぼす地形の影響は、湾奥における水塊の収れんが偏差に最も大きな影響を与える。以上の関係により、本章で紹介したような偏差が数 m に及ぶ大規模な高潮災害においては、吹き寄せ効果の寄与が重要な役割を果たすことが分かる。
第 12.1.1 項 図 12.1.1 タイトル (p. 235)	表面海水 pH の全球分布（ <u>2023</u> 年）及び時系列観測点における表面海水の pH 長期変化傾向	表面海水 pH の全球分布（ <u>2024</u> 年）及び時系列観測点における表面海水の pH 長期変化傾向
第 14.1.2 項 図 14.1.5 キャプション (p. 286)	2°C 上昇シナリオ（SSP1-2.6、左）及び 4°C 上昇シナリオ（SSP5-8.5、右） <u>シナリオ</u> 下での	2°C 上昇シナリオ（SSP1-2.6、左）及び 4°C 上昇シナリオ（SSP5-8.5、右）シナリオ下での

対象	正	誤
第 14.2.1 項(1) 第三段落 (p. 287)	日本周辺の海域で…その北側の反時計 <u>回り</u> の循環である亜寒帯循環（低温で塩分の低い親潮系の水）の境界となっている	日本周辺の海域で…その北側の反時計 <u>周り</u> の循環である亜寒帯循環（低温で塩分の低い親潮系の水）の境界となっている
第 14.2.1 項 図 14.2.2 キャプション (p. 288)	赤線は気象庁東経 137 度定線観測 <u>開始</u> 以降の全期間	赤線は気象庁東経 137 度定線観測以降の全期間
付録 A.2.2 第一段落 二文目 (p. 305)	FORP version 4 は、…『気候予測データセット 2022』に「⑭日本域海洋予測データ」を構成するデータとしてその一部データが格納されている（コラム 4 参照）。 <u>なお、全炭酸濃度や全アルカリ度、溶存酸素等の生物地球化学変量については、version 4 では一部メンバーで計算されていなかったが、これらメンバーについては 2023 年 11 月に公開された version 4.5 で生物地球化学変量が追加されたため、海洋酸性化等の将来予測では version 4.5 も解析に用いている</u> <sup>112</sup> 。  <u>112 : <a href="https://search.diasjp.net/ja/dataset/FORP_NP10_version4_5">https://search.diasjp.net/ja/dataset/FORP_NP10_version4_5</a></u>	FORP version 4 は、…『気候予測データセット 2022』に「⑭日本域海洋予測データ」を構成するデータとしてその一部データが格納されている（コラム 4 参照）。
付録 A.2.2 第四段落 三文目 (p. 305)	海水の膨張や収縮、淡水の流出・流入による海面水位の変化は非常に <u>速い</u> 時間スケールで全球一様に広がるため、	海水の膨張や収縮、淡水の流出・流入による海面水位の変化は非常に <u>早い</u> 時間スケールで全球一様に広がるため、

対象	正	誤
付録 A.3.2 図 付録 A.3.1 キャプション (p. 313)	<p>海面水温の色は、現在気候（1986～2005年）における観測（COBE-SST2）との差（°C）。等値線は現在気候におけるモデルの海面水温を示す（<u>等値線の間隔は 1°C</u>）。海面水位の色は、現在気候（1993～2005年）における観測（CMEMS）との差（cm）。<u>等値線は現在気候におけるモデルの海面水位を示す（等値線の間隔は 10 cm）</u>。赤と青は、それぞれ正と負のバイアスを表す。</p>	<p>海面水温の色は、現在気候（1986～2005年）における観測（COBE-SST2）との差（°C）。等値線は現在気候におけるモデルの海面水温を示す。海面水位の色は、現在気候（1993～2005年）における観測（CMEMS）との差（cm）。赤と青は、それぞれ正と負のバイアスを表す。</p>
その他	表記揺れの統一	